

たのしい たのしい 船穂校 ♪

修学旅行に思う。

修学旅行が来週に迫り、今日16時から引率者打ち合わせ会が予定されています。

宮沢賢治の「或る農学生の日誌」という作品に修学旅行のことが書かれています。今から90年ほど前の話です。家々が豊かではなかったので全員が修学旅行に行ってはいませんでした。農学生は、お父さんに修学旅行に行かせて欲しいと頼みましたが、去年は稲が不作でみんなが困っている時に、おまえだけ修学旅行に行かせることはできないと言います。しかし、あきらめきれなくてつらい気持ちでいました。お母さんがお父さんに行かせてやって欲しいと頼んでくれ、修学旅行に行かせてもらえることになりました。列車の窓から景色を眺めながら、行く先々の街や山や川の様子をすべてしっかりと見てくる。そして、家の人に全部話してあげるんだと言います。

修学旅行に行かせてやりたいと思いつつも妻や母や隣人の気持ちを気遣う父親や、涙を流しながらもう行かなくていいという子ども、子どもの思いを察し懸命に父親を説得したであろう母親、賢治の作品に共通する人間愛や彼の人生観が表れていると思います。ことに、自分は何も語らず父親に聞けと言う母親と、母親に感謝しながらも何も語らず黙々と農作業を手伝う子どもの姿は、情景を思い浮かべると心動かされます。

賢治は、37歳で亡くなるまでに250作にも及ぶ作品を書きました。また、彼は、農学校の教師として、農学者として、弱き者、恵まれない者の助けになろうと思いつけた人でした。もっとも有名な「雨にも負けず」は彼の旅行カバンに書かれていたもので、死後発見されました。

…寒さの夏はおろおろ歩き、日照りの時は涙を流し…

思い出に残る修学旅行になるといいなと思っています。

★作品の原文（抜粋）です。（農学生は賢治本人ではないかと言われています。）

一九二五 五月十二日

今日また人数を調べた。二十八人に四人足りなかった。みんなは僕だの斉藤君だの行かないので旅行が不成立になると云ってしきりに責めた。武田先生まで何だか変な顔をして僕に行けという。僕はほんとうにつらい。明后日までにすっかり決まるのだ。

夕方父が帰って炉ばたに居たから僕は思い切って父にもう一度学校の事情を云った。すると父が母もまた伊勢詣りさえしていないのだし祖母だって伊勢詣り一ぺんところらの観音巡り一ぺんしただけ、この何十年死ぬまでに善光寺へお詣りしたいとそればかり云っているのだ。ことに去年からここら全体の旱魃でいま外へ遊んで歩くなんてことは、となりやみんなに悪くてどうもいけないということ云った。

僕はいくら下を向いても炉のなかへ涙がこぼれて仕方なかった。それでもしばらくたってからそんなら僕はもう行かなくていいからと云った。以下 略

一九二五 五月十三日

今日学校から帰って田に行ってみたら母だけ一人居て何だか嬉しそうにして田の畦を切っていた。何かあったのかと思ってきたら、お父さんから聞けと云った。僕はきっと修学旅行のことだと思った。僕もそこで母が家へ帰るまで田打ちをして助けた。けれども父はまだ帰って来ない。